

日本人を対象とした台湾語教育の実践

呂美親（台湾師範大学台湾語文学系准教授）

一、「台湾語現代文学の歴史再構築および国際化」プロジェクト

2023年から、筆者は台湾師範大学国際台湾研究センターが推進する中核プロジェクト「国立台湾師範大学高等教育深耕計画」に参加している。台湾文学、特に台湾語¹文学を研究している立場から見ると、近年、台湾の華語（台湾式中国語）文学が数多く英語、日本語など様々な外国語に翻訳されているのに対し、台湾語文学はベテラン台湾語作家の陳明仁の作品集『台湾語で歌え 日本の歌』²の邦訳版しかないという現状に、残念な思いを抱いている。本書は、2002年に出版された『陳明仁台語文学選』³を原作とし、収録されている作品のジャンルは、詩・エッセイ・小説・劇本と多岐にわたる。『台湾語で歌え 日本の歌』のようにすべて台湾語で書かれた文学作品が和訳され、大手出版社から刊行されたことは、きわめて意義深いと言えよう。しかしこれまで、台湾で言及される「台湾文学」、そして世界に発信されている「台湾文学」といえば、ほぼ華語で著された作品である。例えば日本における台湾関連の情報は、華語で紹介されたものの割合が圧倒的に多いという状況である。これは、台湾語文学の研究者が少なく、また台湾語が読める外国人も非常に少数であるため、陳明仁の作品のような優れた台湾語文学を、いかにして外国人研究者や読者の注目に結びつけるかという点は、筆者にとって大きな課題となっている。

こうした課題に対応するため、私は国際台湾研

究センターの総責任者である林中力教授に「台湾語現代文学の歴史再構築および国際化」というサブプロジェクトを提出した。学術研究に加え、本サブプロジェクトの一年目の主な仕事は、2023年11月25日に開いた「台湾語文学の翻訳・世界文学の台湾語訳」というワークショップであった。『台湾語で歌え 日本の歌』の共同翻訳者の一人である一橋大学言語社会研究科の吉田真悟助教授や、『銀河鉄道之夜』など世界文学を台湾語に翻訳した成功大学台湾文学系の陳麗君教授、さらに前衛出版社の編集者鄭清鴻氏を講演者として招き、王惠珍教授（清華大学台湾文学所）、頼慈芸教授（台湾師範大学翻訳所）および莊佳穎准教授（台湾師範大学台湾語文学系）をコメンテーターとして迎え、それぞれの研究分野に関する報告や意見などを通じて、台湾語文学と世界文学の翻訳、研究、出版に関する事情を共有してもらった。

ワークショップは筆者を含め多くの参加者から反響を呼んだが、ここで得た知見を踏まえると、台湾語文学の翻訳を促進するためには、まずは台湾語を読める外国人を増やさなければならないと考えに至った。台湾社会においては、台湾



1 台湾語：戦後に中国語が導入される前から、台湾で幅広い民族間で話されてきた言語。

2 陳明仁原著、酒井亨、近藤綾、吉田真悟、訳、『台湾語で歌え 日本の歌』、東京：国書刊行会、2019.09。

3 陳明仁、『陳明仁台語文学選』、台南：金安、2002.02。

語を話すことに対する偏見など、「国語政策」（日本時代：日本語、戦後：中国語。それを国語として普及させ、その他言語を排除する政策）によってもたらされた言語間差別が依然として存在するため、そもそも台湾人の間で台湾語を再び普及させること自体も容易ではない。さらに、たった一つのサブプロジェクトを通じ、言語背景の異なる外国人に短期間で台湾語能力を向上させることは、想定以上に困難なのは明らかである。そこで、日本に留学した経験を持つ筆者は、まず台湾在住の日本人に台湾語を学んでもらうことから始めるのが有効ではないかと考えた。なぜなら、日本は台湾との経済的な交流が多く、歴史、文化など幅広い面で台湾と比較的近く、台湾在住の外国人の中でも日本人の割合が比較的多いからである。

二、集中講義「台湾語だヨ！全員集合 日本語で学ぶ速修台湾語」

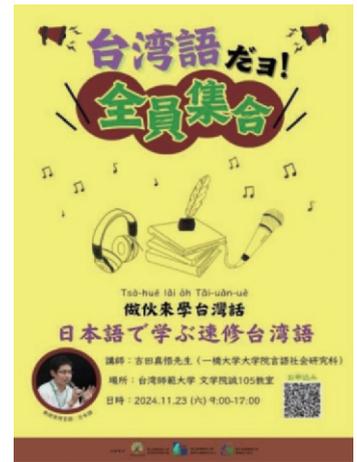
台湾在住の日本人の多くは、その他外国人と同様に華語を通じて生活しており、台湾語に関心を持つかどうかは別として、まずは彼らに対し台湾語への興味を喚起することが重要である。日本人に台湾語を学ばせるためには、適切な教材が不可欠ではあるが、台湾で出版されている台湾語教科書の多くは華語や英語で解説されており、日本で出版された台湾語教材も入門や初級のものに限られているうえ、台湾語表記に用いられる漢字やローマ字が必ずしも標準化されていない。したがって、日本人学習者を対象とした新たな台湾語教科書を作る必要があるものの、適切な教材の作

成には相当な時間を要する。そこで、短期集中型の講義を設け、簡明な入門テキストを作成すれば有効ではないかと考えた。こうして一日完結型の集中講義「台湾語だヨ 全員集合 日本語で学ぶ速修台湾語」を2024年11

月23日に開講する計画を立て、一橋大学の吉田助教授を招き講師を務めてもらった。

吉田助教授は、日本における台湾語研究の若手研究者であり、華語・台湾語の双方に堪能であることに留まらず、台湾語だけで講演を行った経験も有している。本来なら筆者自身で事前に台湾語教科書を用意したかったが、新任教師として多忙で十分な準備時間を確保できなかったため、吉田助教授に講義用の台湾語入門教材を作成してもらった。この教材を用い、日本語で約40名の在日日本人に台湾語を教授した。

受講者には、研究者、大学教師、俳優、大学生、会社員、団体職員など、多様な台湾在住日本人が参加した。吉田助教授は、自身の台湾語学習経験を踏まえつつ、外国人が実際に台湾語を使用できる場面や台湾語自体の意義について、受講者と共に考察するところから授業を開始した。続いて、学習の基礎となる発音と文字（台湾語は漢字とローマ字で表記される）に重点を置いて解説し、



アシスタントとして協力してくれた台湾人学生との会話練習を実施した。限られた時間の中で授業を効率的に進めるため、文学作品の読解や流行歌の歌唱も取り入れ、台湾語の多様な側面を理解・体験できる講義となった。このように、文化的に台湾と近い日本人を対象とした日本語による台湾語集中講義を通じて、新たな文化交流の架け橋を構築し、台湾人と日本人との言語・文化交流を深化させるとともに、台湾語を軸とした海外とのコミュニケーションの可能性を開くことを目指したのである。

集中講義の終わりに参加者から集めたアンケートで明らかになったのは、台湾在住の日本人は台湾語に興味を持っているものの、学習機会に恵まれてこなかったことだった。この結果を踏まえ、台湾語の学習を継続したい日本人に対して、何らかの学習の場や環境を整備する必要があると考えた。そこで、台湾語文学系の非常勤助教授である市川春樹先生に依頼し、台湾師範大学の進修推広学院（社会人向け公開講座センター）で定期的に「日本語で学ぶ台湾語」という初級クラスを開講してもらうこととした。本講座はハイブリッド形式で実施し、海外在住者も受講可能であるため、日本語による台湾語学習の機会を幅広い層に提供できると考えた。一方で、初級クラスを確保したとはいえ、初級から中級段階へ進む際には、自習だけの継続が容易ではないという課題もある。そのため、中級者向けの学習環境を整備する必要があると判断し、日本人向けの台湾語勉強会の開催を検討するに至った。

三、日本人向けの台湾語勉強会

台湾語学習を継続したい日本人のために勉強の場を維持するには、どのような方法があるか熟考した。相応しい教材もまだ整備されておらず、また日本語で台湾語を指導できる人材も不足しているのが実情である。集中講義を共に計画した学生（許鶴齡、洪億詒）と検討した結果、台湾在住の日本人の大半は華語を通じて台湾語を学ぶことが可能であろうと考え、師範大学の台湾語文学系専攻の台湾語教員実習生（台語師培生）に勉強会の講師を勤めてもらうことにした。その後、2025年度の春期と秋期に、計15回の「日本人向けの台湾語勉強会」を開催するに至った。

勉強会のテキストは、吉田助教授の入門編講義を継承しつつ、初級から中級へと段階的に学習内容を拡充したものである。会話内容については台湾文化に焦点を絞り、日常生活で役立つ表現に重点を置き、台湾語の「聞く・話す・読む・書く」基礎能力を強化する構成にした。台湾語教員実習生に勉強会の講師を勤めてもらうことで、教育経験を蓄積させることができるだけでなく、参加者にとっても親近感のある学習環境が形成され、双方に有益な言語交流の場となることを期待した。勉強会では、台湾語の発音体系、ローマ字と漢字表記の使い分け、会話練習などを主な内容とした。使用した教材を繰り返し検証することで、今後の講義設計や教材編集において重要な参考資料となっている。

勉強会を通じて台湾語が徐々に上達していく参加者らを見て、「台湾語新米冒険中」という実地





体験を通じた学習活動を実施することにした。教室での学習と異なり、参加者らを台湾の庶民的な市場である「蘆州中山市場」、伝統的な菓子屋「龍鳳堂糕餅舖」、約三百年の歴史を有する寺院「保安宮」へと連れて行った。リラックスした雰囲気の中で、彼らは「菜市场」（伝統市場）の精肉店や魚屋と直接触れ合い、伝統菓子作りに挑戦したり、保安宮内に残る日本統治時代の碑文や日本製の鐘（参加者の家族が寄贈した貴重なもの）を見

学したりした。台湾語を通じて台湾の庶民文化を体験してもらうと同時に、台湾語でコミュニケーションを試みる機会も提供することができた。

こうした台湾語を体験的に学べるイベントを通じて、台湾語を学びたいと望みながらも機会に恵まれてこなかった数多くの日本人の強い需要を改めて確かめることができた。同時に、日本語と台湾語で使われる漢字の差異、借用語＝日本語由来の台湾語単語（例：thoo-má-tooh＝「トマト」が由来）、日台間の歴史・文化・地域のつながり、といった要素に加え、日本人学習者が台湾語を習得する際のコツなど、日本人向け台湾語教材の編集方針を具体的に定める契機ともなった。教科書の内容はまだ調整中であるが、日常生活における台湾語能力を育成し、台湾語を通じて日台間の文化交流を深めることを目指している。さらに長期的には、台湾文化・文学の翻訳者の育成および台湾語の国際的発展に寄与できることを願っている。

四、『台湾文化を学ぶ 実用台湾語』を編集集中、および今後の展望

台湾語文学を幅広い外国語に翻訳していくため、第一歩としてワークショップ「台湾語文学の翻訳・世界文学の台湾語訳」を実施した。その後、プロジェクトの方向性を模索しながら、第二段階として集中講義「台湾語だヨ 全員集合 日本語で学ぶ速修台湾語」、さらには「日本人向けの台湾語勉強会」へと発展させてきた。勉強会の教材を編





集する過程において、台湾語を学ぶ日本人が、言語習得のみならず、より深い台湾文化の理解を求めていることを強く実感した。確かに外国人は華語を通じて台湾文化をある程度体験することが可能ではあるが、台湾語を理解できれば、よりローカル色が強い台湾文化を体感できると考えられる。

2025年春期および秋期の「日本人向けの台湾語勉強会」の終了後、筆者はスタッフの学生たちと協議を重ね、中級レベルにまで上達したいと考える学習者向け教材『台湾文化を学ぶ 実用台湾語』を編集することにした。現在、2025年および2026年の勉強会で使用した教材の内容を再調整しつつ、台湾語による台湾文化の解説や豆知識を加え、日本ででの出版を視野に入れた教科書として整備を進めている。出版までには時間を要するが、台湾人はもとより外国人も当該教科書を通じて台湾語を学習することで、台湾の文化や歴史を深く理解できるようになると信じている。

多民族かつ多言語社会、すなわち「多元社会」(多様性社会)として広く認識されている台湾ではあるが、現実には言語上の平等性が十分に担保されているとは言い難い。周知のとおり、日本統治時代から戦後にかけて二度にわたる「国語政策」を経験した結果、各エスニックグループの母語はもとより、台湾社会において各民族の共通言語として広く用いられてきた台湾語さえも失ってしまう危機に直面している。2006年には教育部が推薦

用字(常用漢字)および台湾羅馬字(台羅、ローマ字)を公表し、教育現場において台湾語教育が以前より重視されるようになった。2019年1月には国家言語発展法が可決され、台湾の国語は華語のみならず、台湾語を含む各民族の言語であることが法的に規定された。しかし現状では、依然として華語が唯一の共通言語として広く使用されており、またグローバル化の影響により、多くの子供たちが幼少期から英語学習を開始している。その結果、台湾語や客家語、さらには「平埔族」⁴を含める各原住民族の母語は消滅の危機に瀕している。

とは言いつつも、状況は徐々に好転しつつある。2019年5月には「公視台語台」(全て台湾語で放送する公共のテレビチャンネル)の放送が開始された。同チャンネルの番組の半分以上に台湾語字幕が付いているのは、長年にわたる台湾語文字・文学運動の成果の一端を反映しており、台湾語の復興と普及に大きく寄与している。とりわけ台湾語表記の規範化が進むにつれ、母語能力の弱い若年世代が改めて台湾語を学ぶ契機となっているだけでなく、読み書きができない台湾語母語者(台湾語を母語として話すことはできても、ほとんどの人は読み書きを教わったことがない)にとっても再学習の機会を提供している。さらに、オンラインの台湾語辞書や、パソコン・スマートフォン向けの台湾語文字入力システムの開発により、台湾人・

4 平埔族：一般的な原住民族は山間部に居住するのに対し、主に平地部に居住する原住民族。



外国人を問わず、規範化された文字で台湾語を気楽に学習できる環境が整備されつつある。

また、長らく抑圧されてきた台湾語は、近年、多くの文学作品の出版や幅広い文学賞の受賞を通じて、社会から大きな注目を集めるようになった。若い世代や外国人が台湾語を積極的に学習していくことにより、新たな台湾語の側面や新しい台湾文化・台湾語文学の創出へとつながる可能性があるだろう。その際、華語を中心とするいわゆる「華流」に代わり、他のエスニックグループの言語も包含した新たな台湾文化、そして台湾文学研究の発展が期待できるのではないかと、筆者は楽観的に捉えている。台湾語学習のブームが到来する可能性を感じる一方で、台湾文化の根底にある台湾語の美しさ、魅力をいかにして台湾の若年層および台湾文化に関心を持つ外国人に伝えていくかは、今後の大きな課題である。台湾文学・台湾語文学の研究者として、今後も実践的な社会貢献活動に取り組んでいきたい。

時代は絶えず変化している。台湾は長年にわたりで親日的な姿勢を示してきたが、日本社会においては必ずしも台湾への認識が十分であったとは言えない。筆者が日本に留学していた時期に東日本大震災を経験したが、台湾から多額の義援金や物資が寄せられたことを契機として、日本社会の中で台湾に対して徐々に関心を持たれ始めたことを肌で感じた。帰国してから十年程経過した現在、台湾では「台日友好」、日本では「日台友好」といった言葉は広く浸透し、耳にしたことがない人はほ

とんどいないと言ってよい。今日では世代を問わず日本語を理解する台湾人が多く、国内旅行よりも日本への旅行を選ぶ人も少なくない。また台湾華語を話せる日本人も一定数存在し、特に新型コロナウイルス感染症が収束して以降、台湾を訪れる日本人観光者数は回復傾向にある。筆者自身の願いとしては、日本統治時代の建築物の見学や食文化の体験にとどまらず、深い部分の台湾文化に触れてもらいたい。台湾に興味を持つ日本人には、華語のさらにその先にある「言葉の壁」を乗り越え、台湾語、客家語、原住民語といった台湾の本土言語（1945年以前から元々話されていた言語）に触れることで、より原色的で多層的な台湾の独自文化、そして台湾語文学の世界を存分に味わって欲しいと願っている。

関連報道：

【師大新聞】 臺師大推廣台語速修課程 日本語教學搭建臺日語言橋梁

<https://pr.ntnu.edu.tw/ntnunews/index.php?mode=data&id=23052>

【師大新聞】 臺師大再推日本人台語課程 一日班帶領學員入門台語

<https://pr.ntnu.edu.tw/ntnunews/index.php?mode=data&id=24044>

【公視台語台】 設計予日本人的台語課 臺師大推母語國際化

https://youtu.be/T9bRUZVlzmY?si=tKtxXp-4Hm_Pv_F5